

松本清張『或る「小倉日記」伝』の結末部の解釈をめぐる

——研究に打ち込むということの快楽と野心と挫折と——

向井 佑輔

一 「文学研究者」の姿を取り上げた小説

松本清張は、処女作『西郷札』から始めて三作品めにあたる『或る「小倉日記」伝』^{〔1〕}によつて、芥川賞（昭和二十七年下半年）を受賞した。このとき四三歳、翌年に朝日新聞社社員の身分のまま東京に転居、その翌年に専業作家となる。

『或る「小倉日記」伝』は、身体的にハンディキャップをかかえた青年が、小倉時代の森鷗外ゆかりの人々を探して聞き書きをしてゆく姿を描いた評伝的小説である。

近代文学の「研究」に携わる者は、『或る「小倉日記」伝』を「文学研究」論として読んでしまうはずだ。田上耕作の人物像を読むことを通じて、自分の学究への態度や意味づけを意識させられていく。『或る「小倉日記」伝』の魅力はその点に集約されるのではないだろうか。

拙稿『『或る「小倉日記」伝』における松本清張の仕掛

け——その「モチーフ」に投影されたもの——」において、

モデルの実像と作中に描かれた田上耕作との差異を問題にし、郷土史など多岐にわたっていた田上耕作の活動が、小説においては小倉日記の穴埋めだけにされていることを指摘した。^{〔2〕}このことは、結末部における小倉日記の発見の場面に大きな意味を持たせるための小説的仕掛けであると考えられる。そこで、伝記ではなく小説として『或る「小倉日記」伝』を評価する際の肝心な箇所といえる結末部を取り上げ、その終わりを問題にしていこう。

二 小説の終わり方を問題にする

「小倉日記の空白を埋める」ことを終生の目標とした耕作だが、調査の完成を成し遂げられぬまま死んでしまう。

一人の青年の生涯を描いたこの小説が、主人公の死とともに

に終わりを迎えるのは自然なことであるが、その締めくくり方が問題である。結末部は以下のようになっている。

その夜明けごろから昏睡状態となり、十時間後に息をひきとった。雪が降ったり、陽がさしたり、鷗外が「冬の夕立」と評した空模様の日であった。ふじが、熊本の遠い親戚の家に引き取られたのは、耕作の淋しい初七日が過ぎてで、遺骨と風呂敷包みの草稿とが、彼女の大切な荷物だった。(※) (a) 昭和二十六年二月、東京で鷗外の「小倉日記」が発見されたのは周知のとおりである。鷗外の子息が疎開先から持ち帰った反故ばかり入った筆箱を整理していると、この日記が出てきたのだ。(b) 田上耕作がこの事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福か分らない。

(※)の部分で終わらず、傍線(a)の部分が付け加えられることで、劇的な結末となっている。耕作は生涯をかけて失われた小倉日記の「空白を埋めよう」としていたわけだが、小倉日記そのものが発見されてしまったわけだ。こ

のことをどう解釈すべきか。小倉日記の穴埋めは、耕作にとって唯一の生きがいのようなものであった。小倉日記が発見されたことは、耕作の行為の意味づけに何らかの変化を引き起こすのは必然である。そのことを吟味する余裕もないまま、読み進めると、傍線(b)によって小説は締めくくられている。「田上耕作がこの事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福か分らない」という一文は、裏返してみれば、もし耕作が生きていたら小倉日記の発見をどう受け止めただろうかという問いかけになっている。果たして、小倉日記の発見は耕作にとって「挫折」といえるのか。いたい、耕作にとつての幸・不幸とは何なのか。先行する作品の読みにおいて、この小説の結末部について言及したものは多い。それらを取り上げながら、解釈の争点を整理していく。

昭和二十五年の暮に、主人公田上耕作が伝便屋の鈴に音を幻聴しながら、むなく死んでいった運命をあざわらうように、昭和二十六年二月には『小倉日記』が発見されたのである。いわば田上耕作の畢生の事業にとどめを

刺すかのように、その死の直後に『小倉日記』が発見されたことは、いかにも残酷な運命の悪戯にちがいない。

〔平野謙「解説」、『角川版 昭和文学全集Ⅰ 松本清張集』³〕

この傑作短編集（引用者注、新潮文庫『傑作短編集（二） 或る「小倉日記」伝』のこと）に出てくるのは、（中略）最後まで光が射さない人生を生きている主人公ばかりであった。こうも暗い小説を書かなければいけないものか！というのが、最も強く感じた印象である。しかし、面白い。奥が深い。表題作は、芥川賞受賞作である。この作品からして、辛い終わりを告げられる小説で、長い間日本人がありがたがった「人間が描けている小説」とする、重い人生物語に仕上がっている。これは簡単に面白いというより、人間関係の苦々しさのみが前面に出ていて、読んでいて辛い。（ウェブ上の書評⁴）

ここに引用した二つは、結末部を悲劇的であると読んでいる。小倉日記が発見されたことによって、これまでの耕作の行為の意味が否定された。唯一の生き甲斐が否定され

るのだから、小倉日記発見の報は聞くに堪えないものであろう。そう読むと、末尾の一文については、小倉日記の発見を「知らずに死んだ」ことを（せめてもの幸せ）という風に解釈できる。小倉日記が筆筭から出てきたというようなことは、本人の努力では解決できない偶発的で運命的な出来事である。そのような出来事によって主人公が残酷な仕打ちを受けて話が終わるとするのは、長塚節『土』や田山花袋『田舎教師』など、自然主義系統の小説によく見られるパターンといえる。

しかし、暗さや深刻さが作品の力だとする、ありふれた評価をあてるに留まらず、耕作の内面について、もっと想像力を働かせて読む余地があるのではないだろうか。

劣等感を抱いた人間は、自己の存在意義をどうにか見出そうと考える。自分の持つ可能性に一縷の望みを託して、それに全力を尽くすことによって、自分の存在は無駄ではないことを証明しようとするのだ。（中略）耕作の努力に、果たして意味があったか無かったか。そんなことは、本人にとってどうでも良いことだと思う。人間が生きる

目的は、自分の生きがい、つまり、自分がこの世に生まれて来たことの価値を自分で見出し、自分でその価値を高めてゆくことではないかと思う。非常に主観的なものである。それでいいと思う。(ウェブ上の書評⁽⁶⁾)

鴎外の本物の小倉日記は二十六年二月東京で発見された。耕作氏が『この事実を知らずに死んだのは不幸か幸福か分からない』と書いてあるが、地下の耕作氏はやっぱりよろこんでいるに違いない。鴎外漁史の小倉生活をあんなに知りがつていたのだから……。 (日曜の朝の話題芥川賞受賞作品のモデル 惨害にみちた一生 不具文学者田上耕作氏⁽⁶⁾、『朝日新聞』北九州地方版)

この二つの引用文に共通するところは、耕作の主観的な感情を問題にしているところだ。耕作の調査の客観的な価値や意義が小倉日記の出現如何にどう影響を受けるかということと、耕作が調査に打ち込むにあたってどこに自分なりの意味を見い出していたのかということは、次元の異なる問題である。前者では、努力によって芯の強さを確立し

ようとする人物として、後者では、鴎外の世界に触れているだけで心が救われるようなオタクじみた人物として、それぞれ耕作像の読みが提示されている。

ここまで引用してきたものは、小倉日記の発見によって耕作の調べあげてきたものが反故同然になったという前提に立っている。しかし、そもそも、耕作の集めた情報は小倉日記が発見されても無駄にはならないという指摘もなされている。

結局、生涯を賭けた草稿は日の目を見る事も無く、主人公は死んでしまう。清張は、作品の最後に、後年「小倉日記」が発見された事を書いた後、主人公が「この事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福か分からない。」と記しています。しかし、例え「小倉日記」が見つかったとしても、周りの人が見た鴎外と鴎外本人の記述とでは自ずから違いがあり、聞き書きは聞き書きで独自の価値を持つているはずなので、この一文だけは蛇足のような気がします。(ウェブ上の書評⁽⁷⁾)

大塚美保も同じことを指摘している（実物出現をめぐる）

——『在る「小倉日記」伝』——、『国文学解釈と鑑賞』⁸。聞き書きと文書資料（日記）は、別々のものであり、かつ、相互に参照しあうものであるため、小倉日記の発見によつて、かえつて耕作は新たな聞き書きのテーマを得てますます調査を進展させたであろうという。鵑外像を聞き書きによつて相対化することなのだろうが、しかし、耕作はそのようなことまで意識していただろうか。

結末部の解釈の多様性は、耕作の人物像をどう読み取つたのかの反映の結果である。耕作は、調査に打ち込むことの意味をどこに見出していたのか。

三 伝便の鈴の音の象徴するもの

——耕作にとつての学問をする意味（一）

小倉時代の鵑外の足跡を追うというのは、味気ない単調な行動の連続かもしれない。しかし、耕作の鵑外への目覚めの瞬間と死ぬ間際の幻聴の場面が、ともに伝便が係わる形で強調して描かれており、一途な文学青年・田上耕作の

姿が象徴的に現れている。この二つの場面の描かれ方を分析し、耕作の調査に対する姿勢を読み解いていく。

では、耕作の鵑外への目覚めを描いた場面から見ていく。中学生の頃、友人の江南鉄雄から鵑外の『独身』という小説を薦められ、読んでみて感動した。何に感動したのか。そこで伝便が出てくる。まず、耕作の伝便への思い出から見ておかねばなるまい。

耕作が幼い頃、田上家の隣に老夫婦と耕作と同じ年頃の少女が住んでいた。耕作はよく遊びに行っていたが、この家のおじいさんは「色の褪せた半被をきて、股引をはき、わらじを結ん」だ格好をして、「手に柄のついた大きな鈴をもつていて歩きながらそれを鳴ら」して仕事に出かけていく。両親は「でんびんやさん」と呼んでいたが、朝早くと夜遅くに聞こえてくるちりんちりんという鈴の音は子供心にも甘い哀感を誘うものだった。「でんびん」と平仮名表記されているのがポイントで、大人たちの言っていることを音だけで記憶していたわけで、職業名らしいけれどもどんなものなのか分からないままでいたのである。結局、おじいさん一家は夜逃げしたため、「でんびんやさん」の鈴の音

のことも遠い記憶のなかに沈みかけていた。これが、耕作と鴎外を結ぶ上での伏線となるエピソードである。

中学生になった耕作が『独身』を読んだときの感動の瞬間に移る。『独身』は、小倉時代の鴎外の様子の中のばれる身辺随筆的な小説である。雪の夜に主人公が自宅に友人を招いて談笑している様子が描かれているだけで、格別な筋の展開というものはない。「外はいつか雪になる。おりおり足を刻んで通る伝便の鈴の音がする。伝便と云っても余所のものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられている二つの風俗のうちの一つである」というくだりから始まる伝便についての講釈の部分が耕作の心を捉えたところである。

鴎外によれば、伝便とは、郵便では間に合わないような性急な言伝を託す使い走りのことで、西洋では、目印となる徽章の附いた帽子を被って街中の辻々に立っている。西洋文学のなかでは、逢い引きの約束を書いた紙切れを運んだりするような洒落た脇役として登場することもある。でんびんやのおじいさんは、股引にわらじという恰好で、帽子でなく「ちりんちりん」となる鈴の音が合図であるから、

ずいぶん日本的なわけである。

耕作は幼児の追憶が蘇った。でんびんやのじいさんや女の児のことが眼の前に浮んだ。あの時はでんびんやとは何のことか知らなかった。今、思いがけもなく、その由来を鴎外が教えた。「戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞こえるのである」は、そのまま彼の幼時の実感であった。彼は枕に頭をつけて、じいさんの振る鈴の音を現実によく思いがした。耕作が鴎外のものに親しむようになったのは、こういうことを懐かしんだのが始まりだったが、鴎外の枯淡な文章は耕作の孤独な心に応えるものがあつたのであろう。

耕作の感動の質は、回顧的感傷的であると同時に知的である。「でんびん」と意味も分からず音だけで把握していたものが、偶然手にした文献によってその役割や歴史を新しく知った。そこに強く揺さぶられている。「伝便」という漢字表記さえここで始めて知ったのである。自分の見聞きし

ている体験が、偶然書物の中に出てきたら興奮するものだが、そこでさらに、認識が深まるようなことが書かれていれば、発見の興奮はより強められる。鵠外を知る契機となつた伝便のエピソードそのものが、以後の耕作の方向性——つまり、ものを調べていくなかで出くわす新たな発見に興奮し、情報の連鎖の海に喜んで身を浸していったことを予見している。文章の表現に酔うわけでなく、そこに盛られた思想にかぶれるわけでもなく、ディテールの考証に熱を上げるタイプの文学好きなのだ。耕作が、限られた手がかりから鵠外ゆかりの人々を見つけ出していく作業に熱中し得た、それなりの必然性が、伝便のエピソードの段階で既に読み取れる。

伝便の場面は、終盤になつてもう一度出てくる。死ぬ間際の耕作が鈴の音を幻聴するシーンを見ていく。

昭和二十五年の暮になつて、急に彼の衰弱はひどくなつた。ふじは日夜寝もせずに看病した。ある晩、ちょうど江南が来合せている時だった。今までもうとうとと眠つたようにしていた耕作が、枕から頭をふともたげた。そし

て何か聞き耳をたてるような恰好をした。「どうしたの？」とふじがきくと、口の中で返事をしたようだった。もうこのころは日頃の分かりにくい言葉がさらにひどくなつて、唾に近くなつていた。が、この時、なおもふじが、「どうしたの？」ときいて、顔を近づけると、不思議とはつきりと物を言つた。鈴の音が聞える、というのだ。「鈴？」ときき返すと、こつくりとうなずいた。そのまゝ顔を枕にうずめるようにして、なおもじつときいている様子をした。死期に臨んだ人間の混濁した脳は何の幻聴をきかせたのであろうか。冬の夜の戸外は足音もなかった。その夜あけごろから昏睡状態となり、十時間後に息をひきとつた。

死期に及んで思い浮かべるほど、耕作にとつて伝便の鈴の音は大切なものであった。この瞬間において、伝便の鈴の音とは、幼時に聴いた懐かしい音であるだけでなく、鵠外がいた頃の小倉の町の雰囲気と人々、そして、それを解明することに没頭した過去の自分をも想起させるものになつていよう。伝便の鈴の音を耕作が鵠外の調査に打ち

込む姿の象徴として捉えてみるならば、鈴の音が顔を枕にうずめたままじっと聞き続けたくなるような陶酔性をもつものとして描かれているところに、調査に打ち込むということが、耕作にとっては真面目一辺倒のものでなく美的なものとしてあったことが偲ばれる。

勿論、鵑外著「即非年譜」から福聚禪寺へ、福聚禪寺所蔵の魚板から交友のあった人の遺族の元へというような資料や人を辿っていく具体的なプロセスの描写によって、芋づる式に広がる発見の連続に興奮したり、コツコツ調べたりまとめたりすることの確かな手ごたえに喜びを感じる耕作の姿を、読者も一緒になって体験していくことができる。

それに対して、伝便の両場面においても、「調べ」と好きという耕作の人となり、もっと象徴的な形で描き出されている。

耕作が調査に打ち込んだのは、純粹に楽しいから、つまり「内部的充足」を求めてやっている」と解釈できる。

四 「小倉日記の空白」の象徴するもの

——耕作についての学問をする意味（二）

しかしその一方で、耕作は、他者からの評価を意識するような現実感覚も持ち合わせていた。耕作は、調査や執筆といった行為に乗り出すにあたって、そのテーマ設定について極めて意識的であった。鵑外好きが高じて、そのまま足跡を追いかけるように調査へのめり込んでいったわけではない。耕作がどのようにして鵑外ゆかりの人々からの聞き書きを始めるようになったのかを見ていく。

満三年間の「小倉日記」の喪失は世を挙げて惜しまれた。いよいよ失われて無いとなると、「小倉日記」は、そのかくれている部分の容積と重量を人々に感じさせたのだ。耕作の心を動かしたのはこの事実を知ってからだ。幼時の伝便の鈴の思い出がはからずも鵑外の文章でよみがえって以来、鵑外を読み、これに傾倒した。いま、「小倉日記」の散失を知ると未見のこの日記に自分と同じ血が通うような憧憬さえ感じた。耕作がいわゆる足で歩い

て資料を集め、鴎外の「小倉生活」を記録して失われた日記に代えようとした着想はどうして得たであろうか。

そのころは柳田国男の民俗学が一般に流行しだした時だった。白川のグループの青年たちの間にも民俗学熱があり、『豊前』という雑誌まで出した。同人たちは郷土から資料を「採集」し、毎号の誌上にのせた。耕作も初めは郷土誌の上から小倉時代の鴎外を考えていたが、民俗学の「資料採集」の方法を見て、しだいに「小倉日記」の空白を埋める仕事を思いついた。小倉時代の鴎外を知っている関係者を捜してまわり、どんな片言隻語でも「採集」しようというのだ。耕作はこれに全身を打ちこむことにした。鉾脈をさぐりあてた山師のように奮いついた。一生これと取りくむのだと決めた。

鴎外全集の後記には、小倉時代の日記が散逸しており、いくら探しても見つからないということが書かれてあった。耕作はこれを読んだことで「心を動かし」とある。小倉日記が存在する／しない・発見される／されないということとは関係なく、小倉時代の鴎外の足跡を追いかけてみよう

うと考えていてもおかしくはないが、そうではない。全国にいる鴎外の読者や研究家が小倉日記の紛失を惜しんでいるであろうことを意識した上で、小倉にいるという地の利を活かして、自分にしかできない試みを考え出したのである。「鉾脈をさぐりあてた山師のように奮いついた」という表現からは、取り組むに値するテーマを常日頃から探していたことが読みとれる。

耕作が調査に打ち込んだのは、このテーマで人から評価されるような物を形にしたいという気持ちがあったから、つまり「外部的達成」を求めてやっていると解釈できる。

ここでいう「外部的達成」とは、単なる功名心や競争心と同義ではない。あくまでの自分の「内部的充足」のための学問であつたとしても、それを好事家の趣味に堕さないために自らに厳しく課す客観的な基準という意味にもなりうる。「外部的達成」ということの多義性については、後にも触れるので、ここではこれ以上考察しない。客観的にも評価されてしかるべき物を目指し、それが気持ちの張りとなって、耕作を調査へと駆り立てた側面があることは間違いない。

他者の評価を意識するならば、調査を通じて何をあきらかにして何へと発展させていくのかを想定し、調査を始めるにあつての大まかな目標を設定しておくべきである。さて、耕作はこのことをどれだけ意識できていたのだろうか。

耕作は、人々が小倉日記の紛失を残念がっていることを知って、その欲求に答えて一旗上げてやろうと思いつき、そこに以前から興味のあつた聞き書きの手法を導入しようと試みた。しかし、「失われた日記に代えよう」「小倉日記の空白を埋める」という表現は、キャッチコピーにはなるが、調査・研究の目的としては曖昧である。そこから一歩進んで、小倉時代の鴎外の事蹟を調べることが、情報の蓄積というだけでなく、鴎外論としてどういう可能性をもちうるのかを問い詰めて考えておくべきだった。明晰な頭脳を持ち、逆境にめげずそれを生産的な形で發揮しようとした彼も、その点についてはツメが甘かつたといえる。自分の活動をむなしく感じ、煩悶することがあつたのは、そのためである。

そんなこと調べて何になる——彼がふと吐いたこの言葉

は耕作の心の深部に突刺さつて残つた。実際、こんなことに意義があるのだろうか。空しいことに自分だけが気負ひ立っているのではないか、と疑われてきた。すると、不意に自分の努力が全くつまらなくみえ、急につき落とされるような気持ちになつた。Kの手紙までが一片の世辞としか思えない。たちまち希望は消え、真黒い絶望が襲ってくるのだった。このような絶望感、以後ときどき突然に起こつて、耕作が髪の毛をむしるほど苦しめた。

耕作の心には、また堪え難い空虚な感がひろがってくるのだった。こんなことを調べまわつて何になるのか。一体意味があるのだろうか。空疎な、他愛もないことに自分だけが物々しく考えて、愚劣な努力を繰り返しているのではないか。

不意に無意味の感にとらわれて煩悶している。鴎外などとは全く無縁の人物の言葉から投げかけられた言葉にさえ傷つき、平穏な情景を見ているだけでも不安を駆り立てられる。調査に打ち込むことで耕作が心の安定（内部的充足）

を得ていたことは間違いないが、必ずしもそれだけではないことが分かる。

五 「内部的充足」と「外部的達成」のバランスの問題

前章までは、耕作にとつて調査に打ち込むことがどういう意味をもっていたか、「内部的充足」と「外部的達成」の側面から読み解いてきた。ここでは、学問をすることから得られる「内部的充足」と「外部的達成」の両性質の関係性について考えておく。

学問をすることから得られる「内部的充足」とは、知的好奇心の満たされる快感や精神的な落ち着きなど、純粋に学問を好む感情の現れである。勿論、そのようなことにとどの程度の喜びを感じられるかには、個人差がある。一方、学問をすることから得られる「外部的達成」とは、他者の評価を意識してそれに叶うものを成し遂げたいと思う気持ちから生まれる。「外部的達成」を求めることは、過度の功名心や競争心に転化しない限り、何も悪いものではない。客観的評価を基準として学問が行われることは当然のこと

であり、そこには競争という要素が伴う。

「内部的充足」だけを求めて打ち込む学問とは、逃避的で閉鎖的な趣味になりがちである。また、「外部的達成」の実現に過剰にモチベーションを置いてしまえば、その学問は功名心を満足させるための手段に成り下がってしまう。

「内部的充足」と「外部的達成」は対概念ではあるが、どちらに偏るといふことなく、相互に補い合う形で、学問に打ち込むことの意味づけを見出していけることが、もっとも理想的なパターンといえる。

その点で、耕作は優れたバランス感覚の持ち主であった。自分の適性——学業を得意とし、とりわけ、コツコツと積み重ねていく調べごとに向いている——を把握した上で、現在の満たされなさを解消していくための心の救いとして、つまり、「内部的充足」のために、聞き書きという行為に打ち込むことにした。それだけでなく、耕作は、世の中に働きかけるような生産的の行為として学問を考えている。紛失している小倉日記に代わって、鴎外読者・研究家に参考にされるようなものを目指すのはそのためだ。「外部的達成」を意識し、目標とすることで、調査に打ち込む気力を充実

させている。

耕作のテーマに選んだ、小倉時代の鴎外の調査（具体的には、誰と交友があったとか、何をしていたとか）などは、目標に掲げる「外部的達成」としてはこじんまりしすぎかも知れない。しかし、この謙虚さにこそ、耕作のバランス感覚——自分の能力を客観視し、過度の「外部的達成」を求めることを戒め、調べごとがもたらしてくれる「内部的充足」の側面を忘れまいとする姿勢——が読み取れる。

耕作が考えていた「外部的達成」とは、鴎外読者・研究者にとつての小倉日記に代わりになる参考資料を提供することであつた。聞き書きによる網羅的な情報収集だけでも価値はあるものの、欲をいえば、調査結果のもつ資料的価値について、小倉日記の有無ではなく、何を明らかにしていくのに役立つかということを考えておくべきだつた。そうすれば、調査の意味づけや方向性もしつかりとしたものになる。しかし、この点については、耕作は無意識的であつた。

このことは、耕作が、あまり方向を定めずにあれこれと調べていくことの楽しさに溺れていたということであり、

「内部的充足」を求める気持ちの強さとして解釈できるが、同時に、「外部的達成」という点から見ても、調査型研究で実績をあげるということの宿命や陥りやすい問題が端的に現れている。このことについては次章で触れる。

江南は耕作を尊敬していた。耕作が少しも自分の悲惨な身体を暗いものに考えないのにひそかに感心していた。が、江南にも分かつていない。耕作が自分の身体に絶望してどのように煩悶しているかは、他人には分からないのだ。ただ煩悶して崩れなかったのは、多少とも頭脳への自負からであつた。いつてみればそれは羽根のように頼りない支えではあつたが、唯一の希望でないことはなかつた。どのように自分が見られようと、今にみる、という気持ちもそこから出た。それが、たった一つの救いであつた。だから、他人は知るまいが、時には彼はわざと阿呆のポーズさえ誇張して見せた。これを擬態だと思ひ、時には自分の本来の身体さえ擬態のように錯覚してわずかに慰めた。人が嗤つても平気でいられた。こちらから嗤つてやりたいくらいである。自分の肉体をわざ

と人前に曝しているようで、自分ほど手を掩うようにしてかばっているものはないのだった。

耕作は、まわりの人からの視線に耐えられず崩れてしまいそうだった。そして、それを乗り越えて強く生きていくための心の支えを探していた。このことが小説前半部では強調されている。そのため、「内部的充足」をもたらずものとしての学問がクローズアップされがちだ。しかし、耕作が身体的にハンディキャップ抱えて生まれてきたことは、むしろ、耕作を、学問に求める「内部的充足」と「外部的達成」の両面のバランスをしつかりと意識することのできた稀有な人物にさせたとはいえないか。

この章で考察してきた、学問することに求める「内部的充足」と「外部的達成」の問題こそが、『或る「小倉日記」伝』の主題であると私は考えている。耕作の死後に小倉日記が発見されるという結末が設けられていることの意義も、この主題とかかわってくる。

六 「必要な無駄」について

前章までの分析によつて耕作像がはっきりしたので、ここで再び、結末部をどう解釈するかという問題に戻っていく。調査は完成をみないまま耕作は死んだが、調べた内容を原稿という形で遺した。死の直後に、小倉日記が発見された。耕作の原稿の客観的な価値はどうなるのか。もし耕作が生きていたならば、小倉日記発見の報をどう思うかで聞いたであろうか。

仮に生きていた場合の耕作の内面は以下のように想像される。

小倉日記が発見され、調査結果と日記の記述に重複があった場合、苦勞して集めたものの調査結果はその価値を失つてしまう。また、小倉日記の代わりとして隅外の読者・研究者から必要とされるものを形にしたいという目論見は崩れ、何のために調査をやっていくのかという方向性が漠然としたものになってしまった。もはや、同じ方針のまま調査を続ける気力はなくなつただろうし、これまでの努力に徒勞感を感じてもおかしくはない。勿論、打ち込んだこと

じたいは後悔はしていない。ただ、もし小倉日記が発見されると分かっていたら、絶対にやっていなかっただろうとは思わずだ。

二章で整理しておいたように、先行する論において、小倉日記が発見されても聞き書きは独自の価値を持つため、耕作は挫折することはないという解釈が提示されている。聞き書きには文書史料を相対化する価値がある。しかし、四章・五章で指摘したように、耕作は、小倉日記が紛失しているから自分の調べごとに意義があると素朴に考えていただけで、調査結果から鴎外像を導き出さ出すという意識は弱かった。小倉日記の内容と自分の調べあげた内容を等価な情報として捉え、組み合わせていく視点はなかった。

むろん、発見された小倉日記を読んだ後に、耕作が自分のできる調査の意義を再考し、新たな調査の方向性——小倉日記とは違う鴎外の一面を発掘するとか、小倉日記で謎となる記述の部分を地元での聞き書きによって掘り下げていくとか——を打ち立てて再出発する可能性はある。

しかし、生きていた場合の耕作がそういうことを考えるかどうかは分からない。あくまで、小倉日記の発見の瞬間

が、耕作にとつては、気持ちの張りを失ってしまうような挫折であり、これまでの努力に徒労感を感じることがあっただろうということを問題にしたい。

耕作の挫折について、歴史学者の松島栄一が『或る「小倉日記」伝』の読後感について次のように語っていることに注意したい。

ぼくらみたいな歴史家とか、文献をあさっているものは、ああいう、あとから考えたらムダだとおもわれるような努力をやるものなんです。歴史をつないでゆくためにはどうしてもやらざるを得ないんだ。その問題があの小説に非常に明らかに出てると思うんだけどね。『続 松本清張 その人生と文学』^{一八九}

松島栄一は、『或る「小倉日記」伝』を調査型研究における〈必要な無駄〉を描いた小説として読んでいる。松島のいう、「あとからムダだとおもわれるような努力」とは具体的にどんな状況のことなのか。二つのことが考えられる。

まず一つめ。文献にしろ、聞き書きにしろ、網羅的に調べていくというのは、結局研究としては使い道にならないものを多く含んでいる。それは、その当座は分らず、後になってやっと無駄だったことに気づくような性質のもので、必然的に調査者に挫折(徒労感)をもたらすことがある。特に耕作の場合、何を明らかにしたいかという方向性を明確にしないまま、(山があるから登る)式の調査になっていた。後になってから無駄だったと反省させられるような結果になりやすい。これは、本人の責任でもあり、同時に、調査型研究が抱える宿命であるといえよう。

次に二つめ。新たな資料の発見により、従来の資料の価値が目減りすることもある。小倉日記の内容に、耕作の調べあげた内容とほぼ同じようなことが小倉日記により直接的な形で書かれていた場合などは、その典型であろう。この場合もまた、自分の努力を後になってから徒労(「無駄」とまでは言わないにしても)だったと感じるだろう。これもまた、調査型研究の抱える宿命的なものである。

より一般化して考えてみれば、このことは、どんな分野の学問においてもあてはまるのかもしれない。客観的に目

に見えて分かる形にしなければ、その人の行為としては認められない。自分の中ではスクラップ&ビルドの繰り返しである。また、早さということが問題になるため、同じような研究成果が他人によつて先に発表されてしまえば、そのテーマは放棄せざるをえない。ノーベル賞級の理系の研究などは、同じテーマで研究している人が世界中にいて、早さとの勝負であるときえ聞く。

耕作が鴎外に出会う以前のエピソードとして、白川医師が「温泉の研究」によつて学位をとろうとしており、耕作を助手として使っていたが、「不運にも他に同じテーマで学位をとった者が現れ」、それまでの努力が「水泡に帰した」という場面がある。この場面などは、後から読み返したときにはひっかかるところで、取り組んでいる学問を形にしていくことの厳しさは『或る「小倉日記」伝』の背景に流れている。

《必要な無駄》による「挫折」は、前章までのキーワードを用いて言い換えれば、それまで想定していた「外部的達成」がいったんゼロに戻されることである。そして、その挫折の瞬間に、「外部的達成」を差し引いても残る「内部

的充足」をもたらしてくれるものとしての学問の意味が、強く意識されることになる。

耕作がもし、小倉日記の発見の報を聞いたならば、このまま調査を続ける気力を失っただろうし、これまでの努力に徒労感を感じることもあるだろう。しかし、その瞬間にこそ、耕作は、これまでの自分の行為を冷静に見つめ返すことができる。隅外ゆかりの人々を訪ねて聞き書きをしたということとは、一体自分にとって何であつたのか。

結局、調べたことは実を結ばず、目標も見失つた。そこに空しさを感じるが、しかし、もし小倉日記の空白を埋めるための聞き書きに出会っていなければ、もっと空虚な人生を送っていたかもしれない。調査に打ち込むことが、自分にとって心の支えになっていた事実を再発見する。

語り手は、わざわざ「耕作がこの事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福か分らない」などと耕作の内面を付度しながらも決めつけることはしない。耕作を生かしておいたまま小倉日記発見の報に立ち会わせて、そのときの心境を書いてしまった方が、学問による挫折というテーマは伝わりやすいはずだ。そこをあえて書かず、読者に解釈をゆ

だねている。田上耕作にとっての学問をすることの意味がどこにあつたかを考えさせることを通じて、読者じしんの学問への考え方を試しているかのような締めくくりである。

七 まとめ

田上耕作の姿の読みを通して浮かび上がらせてきた小説の主題は、「内部的充足」と「外部的達成」の折り合いの問題、そして、学問に打ち込むことは「必要な無駄」の連続であり、簡単に救いを与えてくれるようなものではないということである。『或る「小倉日記」伝』が書かれた頃は、国文学の講座の中に近代文学の研究はまだ位置づけられておらず、田上耕作はそのような状況の中で作家の調査を自ら選びとっている。描かれている田上耕作の学究の姿はシンプルで古典的なように見えるが、そこには研究に打ち込むということの本質的な部分が凝縮されている。「文学研究」の自明性が疑われつつある現在こそ、『或る「小倉日記」伝』の孕んでいる問題提起が意義を持つてくるのではないだろうか。

最後に、付け加えになるが、松本清張じしんがどのような学究体験をしてきたのかについて書いておく。流行作家となつた後の清張は、昭和史や古代史の領域でも大きな成果を残し、まさに学究の徒であつた。多くの論者によつてその成功は賞賛される一方であるが、作家になる以前の若い頃の清張の姿に目を向けておきたい。自伝『半生^{（10）}の記』の記述を分析していく。

朝日新聞西部本社の社員（広告部所属の石版印刷工）であつた清張は、組織の齒車の「ネジにすら値しない」地位から昇進する望みもなく、「泥砂」の中にいるような日々を送つていた。そういうときに、考古学、ポスターデザイン、俳句、民俗学などに興味を持ち、手を出している。ここから伺えるのは、清張が知的な趣味に喜びを感じるタイプで、一人でコツコツと物を集めたり、作品を作ったりすることが性にあつていたということである。次の文章は、考古学への取り組みについて書かれた箇所である。

校正係主任のAさんが考古学に身を入れていて、よくその話を私に聞かしたものだつた。Aさんは気の弱い人で、

若い部下からは多少軽く見られていたようである。（中略）ある日、彼の家に遊びにゆくと、考古学関係の高価な本が四疊半だかの押入れに一ぱい積み上げられている。ほかに訪ねてゆく者がないとみえ、Aさんはいかにもうれしそうに蒐集した石器や土器の破片など次々と出して私に見せた。この人の影響から、私は社のいやな空気を逃れるため北九州の遺跡をよく歩きまわつた。北九州には横穴の古墳が多い。一晩泊るのは費用がかかるので大抵日帰りだつたが、それでも憂鬱な気分が一日でも忘れられて、どれだけ救いになつたか分からない。（『半生^{（11）}の記』）

現実を忘れた気になれるほど、遺跡を見学し、古物から過去を想像するような非世俗的な行為に没入できるタイプであつたようだ。いわば、心の救いとして、考古学を見つけたといえる。そして、続く記述の部分が、ポイントである。

だが、それも一時の気休めでしかない。結局、そのようなことをしても小さな趣味でしかなかった。趣味は現実

から逃避する一時の睡眠剤かもしれない。冷めると、息の詰まるような空気に、また投げ入れられてしまう。

あるとき大阪から転勤してきた東京商大出の社員が、「君、そんなことをしてなんの役に立つんや？もっと建設的なことをやったらどうないや」と言った。この言葉は私に衝撃だった。実際、九州の田舎を回って横穴をのぞいたり、発掘品を見せてもらったりしても何になるのだろう。考古学で身を立てるというわけでもない。生活にそれほど潤いがつくというほどでもなかった。要するに、将棋を指したりマージャンをしたりすることとあまり変わらないのである。だが、建設的なものをもてと言っても、一体、私に何が出来るだろうか。仮に些少の才能があるとしても、それを生かす機会はない。貧乏な私は商売をする資金もない。今さら、転職もできなかった。このまま停年を迎えるかと思うと私は真暗な気持ちになった。

『半生^{1,2}の記』

将棋やマージャンが比較として出てくるところが興味深い。清張のような人物にとっては、マージャンのような利

的な娯楽は心から楽しむことができず、考古学とか俳句とかポスターデザインのような、真面目にコツコツと取り組むようなものしか、心の支えにはならないのだ。だからこそ、遺跡を見てまわるのもマージャンをするのもあまり変わらないなどという投げやりな表現が急に出てくるのではないか。

もともと勤勉にできている性質なのか、学問や芸術のような、一人でコツコツと取り組むことが多く、その自分の努力が形となって現れやすいものが、性に合うのだろう。遺跡を見てまわったり、考古学を学んだりすることが、心に落ち着きを与えてくれていたとしても、慣れるにつれてその効果は薄れていくだろう。それ以後、学問をすることの喜びを本気で求めるとすれば、それに値するだけのエネルギーをかけて取り組むことが必要になってくるため、それができない以上、学問が本当の救済とはならないように感じる。それまで盲目的に考古学に酔っていたのに醒めた瞬間、それまでに使った時間と労力の分に比例して、感じる虚しさも大きくなる。

無心で学問に打ち込んでみたいという思いがこみ上げて

くると同時に、学問というのは自分なりに形にしないと満足できないもので、後で挫折して虚しさを募らせるだけなら、かえって取り組まない方がいいのではないかなどという考えの間でいつたりきたりしたことが清張にはあるのだろう。そういう経験を清張がしていたからこそ、学問に打ち込むことは純粹に素晴らしいとか、趣味でやるのだから楽しめればいいというような表層的な学問観を超えて、「学問を選ぶということは救いになるか」というテーマを追求する素地ができていったように思われる。そのような若い頃の清張の体験は、『或る「小倉日記」伝』で描かれた田上耕作の姿と地続きのものである。

〔注〕

- 1 『三田文学』一九五二年九月号
- 2 『近代文学研究と資料 第二次第二集』二〇〇八年三月、早稲田大学大学院教育学研究科千葉・金井研究室
- 3 一九六一年六月、角川書店
- 4 <http://www.jcave.com/bunko/bk103.html>
- 5 http://ishibashimasao.at.webry.info/200502/article_2.html

6 一九五三年一月二五日付

7 http://nanakenomomair.nifty.com/home/200708post_9e15.html

8 一九九五年二月号、至文堂

9 一九七七年、清山社

10 一九六六年十月、河出書房新社

11 10に同じ

12 10に同じ

※引用した文章のうちで注をつけていないものは、『或る「小倉日記伝」』の本文からの引用である。定本は『傑作短編集（二）或る小倉日記伝』（一九六五年六月、新潮文庫）とした。